

# 言語に表象される局在性と曖昧性

## The localization and ambiguity represented by language

横山 悌志

### Abstract

Man is a mysterious creature, capable of self-consciousness, language and culture. He created an economic system based on exchange of money and developed a variety of rules and social structures. Although it may be thought to be absurd, nihilistic or pessimistic, it is not too much to say that we, who live in a modern society of nanotechnology, are part of a grand virtual reality brought about by consciousness and communication. It is an irony that this grand virtual reality, called contemporary civilization, threatens to destroy our life as we know it. Eventually it may become difficult to maintain the system of the civilized society that we have created, and we will instead be governed by this new virtual reality.

This paper's topic is "the localization and ambiguity represented by language ". I try to approach man's essence and nature, considering the human species as the highest forms of spiritual perception. Language, that continues to change according to human brain development, I will interpret as virtual reality, and as a means for mind control, also looking at communication based on ambiguous language.

「はじめに言葉ありき」(新約聖書 ヨハネによる福音書 第1章)

神が「光あれ」という言葉を発すると、闇から光が生まれ、光から天地が、海が、生命が、そして人間が生まれた。人間が「言葉」を持ったとき、人間は初めて他の動物と異なる、自然を超えていく存在になった。

しかし、この時から、人間は、傲慢と、欺瞞そして苦悩への道を辿ることになる。

### はじめに

人間は不可思議な生物である。自己意識を持ち、言語を持ち、文化を持つ。貨幣の交換に基づく経済システムをつくりだし、さまざまな決まりごとや社会的なしくみを生み出してきた。現代社会に暮らす私たちは、意識や言語作用が編み出した壮大な仮想現実の中で暮らしていると言ってもいい。あまりに巨大化し複雑化してしまったこの現代文明という壮大な仮想現実が皮肉なことに、私たち自身の生命をも押し潰そうとしつつあるように思える。人間は自分自身が作り出した文明社会のシステムを維持することが自己目的化し、それにふりまわされてしまっている。

ふだん、私たちはいろんなことを気にし、仮面（ペルソナ）をかぶり、心に壁を作り、他人と自分

を比べながら日々を送っている。「いい大学を卒業して、いい会社に入らないと幸福になれない」とか「みんながそうしているからそうしておいたほうがいい」とか「周りの人からどう思われるだろうか」とか。そういうことで悩んだり苛立ったりしている。

この文明社会が仮想現実だという認識は、現代の科学から見れば、荒唐無稽で、ニヒリズムや厭世主義に結びつくと思われる人もいるかもしれない。しかし、日常意識の「くびき」から一時的にでも自由になり、何も考えずにダンスで熱狂的に踊ることで多くの人々と「生の歓び」を共有するというのは、一種の「覚醒」の経験である。何百冊の本を読むよりも一回のダンス体験のほうが、人間としてこの地球に生きることがほんとうにどういうことなのかを直接に実感させてくれる。その時、かつて自分が仮想現実の世界で暮らしていたこと、直接に自然や他者とつながりあうような回路を失っていたことを悟る。都会で、がんじがらめの管理組織社会で、肩に力を入れ無理をして生きてきた人が、熱狂的ダンスを体験するようになって心の殻を取り払い、自然体で他者や自然とのふれあいを持てるようになった例は、枚挙にいとまがない。人間の自然への回帰願望は永遠に続く。

### 仮想現実としての言語

仏教の聖典、「般若心経」について書かれた本は数多く出ているが、どの本の説明も観念的で、科学技術偏重の時代に生きる現代人には素直に受け入れられない。例えば、目の前にご馳走が並んでいて良い匂いが漂い、ナイフで切れば皿の音がし、フォークで刺せば手ごたえと重みを感じ、口に運べば暖かさと味と歯ごたえを感じるとき、「色即是空とは、目に見えるものは実体のないもの」という意味だよと言われても、「はいそうですか」とはなかなか言えない。しかし、近年の急速な科学技術の発展は、皮肉なことに宗教の言葉の意味を理解しやすくしている。

テーマパークや博覧会などに行くと大画面の立体映画が展示されている。これを見ると、画面の前に映像が飛び出してくて、実際には物がない空間に物があるように感じる。特に、動いたり振動したりする座席に座って乗り物に乗っている画面を見ると、立体音響の効果もあって、実際に自分が動いているかのように錯覚するようになりアリティがある。

また、頭部模型の耳の位置に小型マイクロフォンをつけて録音した音をヘッドフォンで聞くと、頭の周りの空間に実際に物があるように感じる。

視覚、聴覚に加え、触覚、味覚、嗅覚を忠実に再生できるようになれば、再生されたイメージの世界は現実の世界と見分けがつかないほどの現実感が増幅される。例えば、目の前にご馳走が並んでいてそれを食べているイメージがあると実際に食べているように感じてしまう。

しかし、このような他人の作ったイメージは、自分の思うとおりにストーリーが進行しないのが現実の世界と異なる。この料理は嫌いだから食べたくない、と思ってもイメージの世界では食べてしまう。他人の作ったイメージの世界ではせいぜい何箇所かでストーリーの展開を選ぶことができるようにするのが精一杯である。

## テレロボットとしての言語

最近、2足で歩行し、踊りまでする人型のロボットが開発された。また、脚を固定されたロボットでは、オペレーターの上半身の動きと同じ動きをする人型のロボットがすでに博覧会などで活躍している。無線でオペレーターの動きのとおり動く二足歩行ロボットも開発されている。そして、このロボットの両目には超高精細で広い視野のビデオカメラを、両耳にはマイクロフォンを、鼻には嗅覚センサーを、舌には味覚センサーを、全身の表面には圧力センサーや温度センサーを、頭の中には加速度センサーを組み込んでこれらの信号を無線によりオペレーターに伝え、忠実に五感を再生すれば、このロボットはオペレーターの思いのままに動き、ロボットが受ける五感の情報がすべて伝わってくるので、オペレーターはロボットがまるで自分の体のように感じるだろう。

この技術が発展すれば、だれでも体を動かさずにロボットを操り、自分は椅子に座ったままで、自分の代わりに仕事をさせたり、世界中を旅行したり、人間には危険で立ち入れない場所に行くことができるようになる。現実には、作業用ロボット、偵察機や潜水艇に採用されている。また、人間ではなく動物や虫のロボットを操縦すれば動物や虫の世界を体験できる。

ところで、ひどく疲れて電車の中で眠り込んでしまい、目を覚ましたとき自分がどこにいるのかわからなくなることがある。また、深酒をしてどのようにして帰宅したか、その時間帯の記憶がないことがある。このように深く眠ったり泥酔しているときに、その人の体に、その人とよく似たロボットの操縦装置と五感の再生装置をつければ、その人は気が付いたときにはロボットから送られてくる五感の信号から再生されたバーチャルな世界が現実の世界だと思い込んでしまうだろう。そのとき、その人にとっての現実の世界は実際にはバーチャルな世界なのである。すなわち、色即是空、目に見えるものは実体のないものとなる。

実は、私たちが現実の世界と思い込んでいる目の前の世界もこのようなバーチャルの世界ではないかと思われる。目の前の世界が現実の世界だとすると、科学では説明のつかない不思議な現象がたくさんあるからである。そのもっとも良い例が超常現象である。超常現象は科学の法則に反するからそんなものは存在しないと言えば簡単であるが、それは科学ではない。なぜなら、自然（古典）科学の基本法則は経験則であって、すべての現象と矛盾しないことが正しさの根拠になってきた。だが、私たちの体が精巧なロボットであって、この世の中がバーチャルな世界だと仮定すれば、いろいろの超常現象は簡単に説明できるのである。

## 超常現象と体外離脱体験

たとえば、脳と心の関係について、これまで多くの研究がなされ、多くの成果をあげてきた。「心は脳の機能」であるということは、どうやら真実のようである。神経細胞（ニューロン）はどこまでも細かく調べられ、それらを構成する様々の素子の分子構造からそれぞれの細胞の性質までがほぼ明らかにされている。また様々な測定機器の進歩により、生物を生きたまま機能の面と関連づけながら様々

な現象を測定することができるようになってきた。MRI や PET (Positron Emission Tomography : 腫瘍の機能をみる画像診断) から得られた美しい CG をもちいて脳と心について説明されれば、素人目には心脳問題のすべてはすでに明らかになっているように見える。しかし、そこには最大の難関がある。それは「心の立ち上がる瞬間」である。一体何がどのような機構で働いたときに「心」は生起するのだろうか。心自身である私にとって、その刹那は最大の謎である。

ところで私自身、いくつかの「体験」を通して、自分の心とそれが感じている世界が、実はそれほど確固たるものではないのではないかと考えている。その体験というのが、「体外離脱体験 (OOBE: Out Of Body Experience)」である。調べてみるとそれほど特殊な体験ではなく、誰の身にも起こる可能性がある。頻繁に体外離脱が報告されるのは「臨死体験」である。しかし死に瀕さずとも体験される OOBE も多くあるようだ。

私の個人的な体験では、五十九歳にして胆嚢摘出手術を余儀なくされ、その全身麻酔がまだ醒めやらない時だった。全てが透きとおる透明なガラス張りの宮殿の中にいた。床も透きとおる、すべてがキラキラと輝き、庭園にはいろいろな花が咲き乱れ、池には白鳥が悠々と泳ぎ、この世のものとは思えないほど、のどかで美しい桃源郷にいた。麻酔が醒めかかるとき、そばにいた看護師さんを、責めるかのような口調でかなり激しく叱っていた、と、正気に戻ったときに家内が教えてくれ、恥ずかしい思いをした。

OOBE の境界上にいたり、麻薬・アルコール中毒患者や精神病患者が口走ることばは、無意識 (潜在意識) 下の言語とはいえ、実に自己中心的表現であり、普段仮面をかぶって口にできないことば (本音) を平気で言ったりして、意識と言語、言語の本質と発生過程に興味をそそるものがあった。

臨死体験した人には世界中で共通したいくつかの要素がみられるという。体外離脱・三途の川のような境界のイメージ・トンネル・光のような絶対的な何かへの遭遇・お花畑のような安らぐ環境・故人との再会などである。さらに、人生のパノラマ回顧というものも多く報告されている。面白いことに、臨死体験ではその体験時の心は平静で、さらに「エクスタシー」を感じたと言う。また、ほとんどの人はそれ以来、死が恐なくなり「人生を積極的に生きよう」という変化がみられるという話もある。

### 『五蘊皆空、色即是空』

なにも超常現象ばかりではない。私たちの周りには不思議なことが満ち溢れている。

例えば、沖縄群島から関東地方まで、旅をするアサギマダラという蝶がいるが、蝶の小さな脳で初めての道を数千キロも迷わずに飛んでいけるはずがない。蝶もテレロボットであり、見えざる存在に操縦されているのだと考えれば説明がつく。地上にある生物は進化してでき上がったものだとされているが、このような複雑きわまる有機体が偶然の積み重なりでできるはずがない。地球上の生物の体は、きわめて高度な科学技術によって作られたロボットとみなしても不思議はない。

般若心経には『五蘊皆空、色即是空』と書かれている。五蘊とは五感のこと、色とは目に見えるもののことである。「五感の実体のないもの、目に見えるものは実体のないもの」だと述べている。つまり、「五感はバーチャルなもの、目に見えるものはバーチャルなものだ」といっている。そして五蘊皆空、

すなわち五感で感じている世界はバーチャルな世界だと知れば、一切の苦を克服することができるという。例えば、自分がひどい目にあっていてもそれは自分が操っているロボットがひどい目にあってるのであって、本当の自分はただバーチャルなイメージを体験しているだけである。逆に、地位や名誉を得たといってもそれはロボットがそういう立場になっただけで、自分は何も得ていない。地位や名誉はなんの価値もない。実際、世界的な大発見や大発明をしたといってもそんなものは、この世というバーチャルな視界から見れば、とるに足らない些末なことだと言っているのである。

なぜ、バーチャルリアリティの技術もなかった昔の宗教家がバーチャルな世界のことを知っているかといえば、この世というバーチャルな世界を作ったきわめて科学技術の進歩したより高次元の世界から情報を受け取っていたからである。宗教ばかりでなく芸術や科学の偉大な天才たちは、このような高次元世界から情報を受け取って素晴らしい仕事をしている、という仮説にたてば、それなりの説明はできる。

### 量子力学としての言語

新時代科学の主要な分野である「量子力学」は、エルヴィン・シュレディンガー、ニールス・ボーア、ヴェルナー・ハイゼンベルグ博士等のノーベル物理学賞を贈られた著名な理論物理学者達によって、創始され発展した新しい科学であり、原子内部の素粒子の動きを研究する科学とみなされている。

素粒子とは、物質的存在の素（もと）になる粒子という意味であり、具体的には、電子・陽子・中性子等を指す。ところで、人間の身体は、器官・臓器・骨格・筋肉・皮膚等の全ての組織は、成人で約60兆個の細胞によって構成されている。その細胞は、分子が組み合わされて出来ている。その分子は、原子が組み合わされ、その原子は、陽子・中性子から成る原子核と、電子が組み合わされた組成構造をなす。

したがって、人間の身体は、60兆個のさらに膨大な倍数になる「電子・陽子・中性子等の素粒子によって構成されている」ことは、自明の真理であり、私達は、「素粒子の集合体」そのものである。

さて、量子力学の「電子に関する実験」では、「1個の電子を、10個の穴を開けた板に向けて発射すると、同時に10個の穴を通過する。さらに、板に50個・100個の穴を開けた場合でも、1個の電子が、同時に50個・100個の全ての穴を通過する」という、特異な性質があることが解明されている。

つまり、量子力学の素粒子の世界では、「1個が同時に多数個でもある」という、普通の常識を越えた不思議な特異現象があることが解明されている。ところで、その謎を解く理由は、電子は、「点状の粒子性」と、「広い範囲に広がった波動性」の両面を持っている。粒子性の面は、肉眼に見えて、1個・2個・3個……と数えられるが、もう一方の波動性の面は、空間に融け込んで普遍化しているために、肉眼には見えず、数えることはできない。つまり、電子は、3次元の物質界に現象して、現れている面は粒子性になり、現象を超えた高次元の空間に存在している面は、波動性となっている。

## 高次元生命体としての人間

電子の「粒子性と波動性」では、「本質は、高次元空間の波動性の方であり、それが広い範囲に広がっている」ので、板に多数個の穴があれば、多数個の粒子として現象して現れ、観測者の肉眼に見える。このような「波動性と粒子性」の両面を兼ね備えた存在を、現代科学では、「量子」という新しい概念で表して、量子力学が発展している。

ところで、私たちは、肉眼に見えない、つまり、目に見えないものは存在しないと、直ちに決めつけるわけにはいかない。電氣的波動の電波も光ファイバーの光も、目には見えなくても、空間に存在していて、テレビ・ラジオ・携帯電話等を機能させて、映像・音声等を現象させている。同様に、電子等の量子も、本質の波動性は、目には見えなくても空間に存在していて、目に見える粒子を現象させている。

このような電子等の素粒子の特質は、3次元の現象・現実界と、高次元の本質界との架け橋になり両方に存在しているので、その素粒子の集合体である物質も・植物も・動物も・人間も、全ての存在は、当然、この3次元世界と、高次元世界の両方に存在している。

つまり、私たちは、目に見えないが、存在している「波動性の高次元世界」から現象として現れ、「この世は仮の宿り」という古典的表現にもあるような現実界に存在している。

私たちの身体は、電子等の素粒子の集合体であり、人間の存在の基盤は、素粒子の働きそのものだから、目に見える身体があると同時に、その身体を現象し生み出している目に見えない高次元の生命の本質体＝「高次元生命体」が存在している。このことは、科学的な実験にもとづいて、検証されて導かれた、否定することのできない厳然とした事実となっている。

## 言語の局在性と非局在性

量子力学界の巨匠、デビッド・ボーム博士の研究によれば、「高次元の目に見えない暗在系（潜在系）の世界で、波動として存在している素粒子の原体（量子）が、3次元の目に見える明在系（顕在系）の世界へ電子（マイナスの電荷）と、陽子（プラスの電荷）の一对の素粒子になって現れてくる。そして、この電子と陽子が、また結合して粒子性を融合し一体化すると、光になって波動化して、元の暗在系の高次元世界に戻っていく」という事実が発見されている。

このような、高次元世界から、3次元世界への、「波動性⇒粒子性⇒波動性⇒粒子性」へと、交互に変遷する現象作用が、量子・素粒子の集合体である私達の身体や周囲の全ての物質で、常に繰り返し行われている。

私達の身体や周囲の物体は、普通感覚では、現実の実体として存在しているように見えるが、その素（もと）になる素粒子・量子が、常に、「波動性⇒粒子性⇒波動性⇒粒子性」へと変遷しながら、生成（粒子性）と、消滅（波動性）を繰り返しているのです。その素粒子の集合体としての私達も物体も、本当は「刹那」ごとに、つまり、極めて短い瞬間瞬間ごとに、生成と消滅（locality and non-locality）を繰り返して変動していて、決して、実体として固定的にあるもの（stability）ではない。

生成と消滅のうち、私達の肉眼には、きわめて短い瞬間瞬間の生成の部分だけが連続して見えてい

るので、あたかも実体として存在するように感じられが、このような視覚認識は、本当は錯覚であり、錯誤的認識である。

この視覚作用と同様に、高次元生命体（人間とすべての生物）の口から、発信される音声（ヒト言語を含む）もまた、私達の聴覚器官で感知できないところで、生成と消滅を刹那的に繰り返す、素粒子の一部と見なすことができる。現実には、そばに誰もいないのに話し声が聞こえたり、夢や無意識の中で、相手の会話をはっきり聞き取れるのも、この高次元現象作用と見なすことができる。

このように、現代科学の研究により、存在の原点は、高次元生命体にあることが、科学的に証明され解明されている。だが、最先端の科学的認識は、残念ながら、まだ人々の常識にまでなっていない。これまでの科学的常識といえば、約300年前からのニュートン力学の自然科学と、せいぜいアインシュタイン博士の相対性理論くらいであるが、現代では、量子力学、ナノテクノロジー、ニュートリノ等のおかげで、これまで信じ込まれていた古典パラダイムが、ことごとく塗り替えられ、現代科学の常識となりつつある。かく言う私も、江崎玲於奈博士の講演をきっかけとして、量子力学の世界にのめり込み、これまでの人生観が一変するような知的衝撃を受け続けている。

#### 人間の脳とともに変化し続ける言語

上述したように、前世紀の相対性理論と量子力学という二つの革命は、ニュートン以来の古典力学の枠組みを根こそぎひっくり返すとともに、私たち人類の世界観、宇宙観まで変えてしまった。相対性理論は原子爆弾や原子力エネルギー、量子力学はトランジスタという、私たちの生活の様子をすっかり変えてしまう技術へとつながった。

ある法則が普遍的であるとは、その法則が、宇宙のどこでも基本的に同じように成り立つということである。ニュートンが偉大だったのは、りんごが木から落ちるという現象と、月が地球の周囲りを回っているという現象が、「万有引力」という一つの法則の表れだということを見破った点にある。電磁気力、重力、強い力、弱い力という物理学の基本的な4つの力を巡る法則は、日本でもアメリカでも成り立つばかりか、宇宙のどこでも成立すると考えられる。また、小は素粒子、細胞内のタンパク質の動きから、大は星雲の形成、ビッグ・バン迄、あらゆるスケールの現象が、基本的に同じ自然法則で記述されると考えられる。早い話が、次の日蝕がいつどこで起こるか予言できるのも、物理法則が定量的に驚くべき正確さで記述されているからに他ならない。

私たち人間の脳の状態は、毎日変化している。全く同じ状態に戻ることは決してない。変化し続けるということこそが、脳の最大の特徴と言ってもいい。

私たちは、デジャヴという、特殊な心の状態に陥ることがある。すなわち、自分が現に経験していること、あるいはこれからまさに経験しようとしていることが、あたかも以前にすでに経験したことがあることのように感じられるという現象である。

デジャヴが、どのような脳内のメカニズムによって生じているかは現時点では明らかではない。おそらく、あるイベントを以前のイベントと比較し、再認するプロセスに何らかの異常が起こっているものと考えられる。

デジャヴュは珍しい、印象的な出来事なので、記憶に残りやすい。しかし、もっと驚くべきことは、デジャヴュが生じていない、日常生活の殆ど全ての時間において、自分が現に経験していることが、今迄に経験したことのない、新しい経験であるということを、私たちが知っているということである。毎日くり返しやっていることでさえ、私たちは、それが、どこか微妙な点で、昨日とは、一昨日とは違っているということを知っている。実際、毎日同じようなことをくり返しているように思えて、私たち人間の脳は毎日少しずつ変化しているのである。

## 言語の曖昧性とコミュニケーション

高次元生命界における現象は、生成（粒子性）と消滅（波動性）の繰り返しである。視点を変えてみれば、3次元の目に見える明在系（顕在系）の世界においては、創造と破壊の繰り返しと捉えることができる。破壊された粒子は元に戻ることができないし、元の姿を留めておくことも不可能である。

生者必滅、会者定離、もののあはれ、はかなさ、この世は仮の宿り等という、日本人特有の表現は、同じ姿を留めておくことができないことに対する、哀惜の念を込めた表現でもある。高次元界には存在しない3次元界時間の概念の「過去」という言葉を借用すれば、過去を取り戻したり、過去を完全に再現したりすることは不可能なのである。

地球上のすべての生命体も、科学の進化も、大河の流れのごとく流れ、留まることなく変わり続け、万物は流転する。人間とは、この流れの中で、「自分が自分であって自分ではない」という不思議な自分という高次元生命体の集合体でもある。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。」鴨長明は、一丈四方という方丈の庵の中で閑居して、空蟬（うつせみ）の世をかなしむ「無常観」文学を残した。

長明は、後白河がまだ天皇だった在位期に生まれた。死んだのは後鳥羽院の時代である。その半世紀のあいだ、日本史上でも特筆すべき大きな変化がつづいた。武家が登場し、その代表の清盛がまたたくまに貴族社会を席卷して新たな「武者の世」を準備したのもつかの間、その武家を大きく二分する源平の争乱が列島各地を次々に走った。それで収まるかとおもえば、初めて東国に幕府を構えた頼朝政権はわずか三代で潰えた。まさに「世の中浮き立ちて、人の心もをさまらず」。平家が滅亡し、そして源氏が滅亡したのである。見れば、「むかしありし家はまれなり」「古へ見し人は二三十人が中に、わづかに一人二人なり」なのだ。そのなかで法然や親鸞が、栄西や道元が、明恵や重源がまったく新しい価値観を求めて立ち上がっていった。文化史上では、俊成・定家の親子が和歌の世界を仕切って、いわゆる新古今時代をつくった。のちに本居宣長が言っていることだが、このとき日本語がはっきりと姿をあらわした。漢字と片仮名、もしくは漢字と平仮名の混ざった和漢混淆文が登場し、長明の無常観とは裏腹に、後世の日本人のアイデンティティとなることば、大陸から独立した大和民族の言語、日本語のあけぼのとなった。優れた文学・芸術作品、新しい学説、理論、記録は、いつの世も逆境の中から誕生し、旧パラダイムは塗りかえられ、神話となっていく。

老化のミステリーの視点からみても、3次元生命体にとって、時間とは本質的に姿を変えることで



ある。「進化の原理」では、遺伝学的には老化はありえないのであるが、一度分裂した細胞は元に戻ることができないと同様に、人間も、社会も、元に戻ることはできない。時間は姿を変えながら、刻々と変化する。したがって、3次元界（この世）に同じ個体は存在しない。それは過ぎた時間が、みなそれぞれ異なるからである。

このことを前提として、もし、言語が現実を忠実に写し取り、それを他者に伝達するための手段であるとすれば、様々な不完全性が生じるが、その不完全性は、私たちにとって必要な不完全性とも言える。

私たちは、感動的な体験をしたにもかかわらず、それを的確に表現する言葉が見つからずに、もどかしい思いをしたことがある。現実が個別的で具象的であるのに対して、言語は抽象的である。風光明媚な景色を「絶妙の美しさ」という手垢にまみれた陳腐な言葉で形容しても、言いたい事を表現した気にはならない。だから私たちはしばしばこの言語の不完全性を嘆き、「もっと言葉が表現力豊かで、完全だったら良いのに」と思う。

しかし、もし言語が現実を忠実に模写するとなれば、言語と現実は一体となり、言語は不要ということになる。言語は現実を抽象化（abstract 捨象）するがゆえに言語なのである。すなわち、言語とは捨てる技術である。

脳内意識の処理能力が限られている以上、言語は、現実の多様性の圧倒的多数を捨て、生存に必要な最小限の情報だけを取捨選択せざるをえない。しかし何を捨てるかは、主観的で、各個人によって異なる。このことは、言葉の意味は、使っている人によって微妙に異なっていることを物語っている。

言語によるコミュニケーションにおいて、言葉の意味の違いが、誤解を生み、しばしば喧嘩や戦争のきっかけにすらなる。だから人はしばしばこの言語の不完全性を嘆き、「もし言葉の意味が万人共通であれば、誤解に基づく無用な混乱は起きなくてすむのに」と悔やむことがある。しかし、「生存に必要な最小限の情報」が何であるのか不確定である以上、個人ごとにさまざまな抽象＝捨象のパターンを作って、自然淘汰によって選別することが、種全体の存続にとっては必要である。言葉をどう定義するかは、その人の思想や価値観とは切り離せない関係にある。だから言葉の意味を画一的に固定することは、知の発展にとって必ずしも望ましくないのである。

このように言語には様々な不完全さがあるが、その不完全さは、是正されるべき欠陥などではない。むしろそれは、人類という種の維持・発展に貢献しているとも言える。

### 言語の曖昧さを利用した詭弁と衆愚体制

ことばの曖昧さとコミュニケーションについて考えるとき、ことばは曖昧で混乱した概念を使わざるを得ない。ことばは多義的であり、それによって様々な解釈をすることが可能になる。たとえば聖書の解釈をめぐるのは、聖書を文字通りに読むと神の絶対性が危うくなりそうな部分があるが、「文字通りに受け止めれば間違いだが、霊感的には正しい」とパスカルは言っている。このように、完全な存在としての神や、個人崇拜を必要とする独裁者を擁護するためには、ことばの曖昧さを利用した詭弁（sophistication）が役に立つことは、聖書だけではなく、ヒトラーや毛沢東などの独裁政権の時代に行われた国家指導層の演説、マスメディアの報道、政治や宗教団体などの洗脳を目的とする集会等においても明らかである。ことばの本質的な曖昧さと多義性による様々な解釈の可能性を取捨選択

し、普遍的文脈の周縁に存在する極端な解釈をことばに与えるとき、詭弁が生まれる。

メディア言語（映像）による意識の統制と衆愚体制 (ochlocracy) も同様である。

映像イメージが論理や思考力を排除することは大宅壮一氏が、テレビが出現したときすでに「一億総白痴」という表現で予言しているが、現代人の思考力や洞察力を加速度的に希薄化している。映像という仮想現実を巧みに操り、意識を統制し、空洞化させている。

視聴率を上げるために、なりふり構わない刺激的で強烈なイメージ、凶暴残酷きわまりない恐怖のイメージ、日常性を逸脱した狂気のイメージ、興味本位の享乐的退廃的イメージが現代人の思考力を一掃し、圧倒し、論理を無力化している。

取材や報道のあり方がじつに下賤で、下等である。情報産業という業界は、人の喜怒哀楽、美聞醜聞をネタに土足で踏み込み、呆れかえるほど次元の低いところで大衆の無知につけ込み莫大な利益を貪る、じつに賤しい業界と思われても仕方がない。

映像イメージの持つ現在性、刹那性が歴史、哲学を無力化しているのも事実である。一部の真摯な例外をのぞいて、歴史の縦軸というものが意識されていることはほとんどない。歴史的に大事な事柄がじつに軽く扱われ、視聴者がすぐに飛びつく刺激的な、しかし、歴史的にはさして意味のない事件をのみあたかも大事なことのよう伝える傾向もある。

このような状況の中では、社会全体が非常に強力な慣性の法則によって支配されていく。意識的であれ無意識的であれ、良心的（悪意なき）知識人やコメンテーターは、好むと好まざるとに関わらず意識産業を通じてしか発表の場を持たないため、メディアという意識産業の共犯者となる危険性を常にはらんでいる。

いつの世にも、地獄への道には善意という美しい玉砂利が敷きつめられている。ミルトンは『失樂園』の中でサタンにこう語らせている。「わたしは、どうして内なる地獄に、苛まれる身となったのか。なぜ幸福な神の世界から、地獄への道をたどってしまったのか。それは余りにも高い地位に挙げられたため、わたしは服従を嫌悪するにいたり、ほんのもう一歩高く昇れば、我こそは最高の者になれると思った。神に感謝を捧げることも全く当然なことであった。しかるに、神のすべての善がわたしには悪となり、悪意のみを生ぜしめた。」やがてサタンはエデンの楽園に密かに侵入し、へびに化けて人間の言葉を話し、言葉巧みに（詭弁をもって）悪知恵を弄して、アダムとイヴに、「知識の樹」に実る禁断の果実を食べさせてしまう。

決して悪意ではない。むしろ善意に満ちた市民主義的な善意が、非常に底の浅い善悪の二分法により、メディアが愚かな大衆を統制する、と、体制がメディアを統制するの両義を持つ、「メディア・コントロール」というものを生み出している。

そして非常に短絡的にいえば、そのメディア・コントロールの浸透性を無意識に、巧みに、しかも善意を持って隠された「良識力学（量子力学ではなく）」というのが、時宜を得た旬のお料理教室のごとく、時の話題を解説する各紙一面のわずか一段のコラムのようなものではないだろうか。原稿用紙二枚足らずで世界を論じ、善意を論じ、世の中を嘆いてみせる。そこにあるのは似非人間的でうすっぺらのヒューマニズムであり、じつに楽天的な世界像の矮小化にほかならない。

しかしながら、この伝統的なコラムなるものが、世の中の良識というものを形づくり、堆積して、創造的意識を搾取し、無力化し、イナーシア（慣性の法則）を全体的に支えている。しかも、この良

識は、現状を打破したり、イナーシアにブレーキをかけたり、方向を変えたりするようなものでは決してない。適度の社会批判、多少の反省、それが我々の日常生活にとって最良の策であり、世の中は、さして悪くも特別に良くもない、と自信たっぷりに説いているのである。

### マインド・コントローラーとしての言語

この世に不可視のマインド・コントローラーがいるとしたら、これは特定の個人ではなく、情報産業というどこにでも絡みつく納豆菌の菌糸のようなシステムであり、それによって、無意識に意識を統制されていくのである。

意識産業の手にかかると、凡庸なありきたりの曲もヒットソングに、カール・マルクスのような偉大な人物の思想も、意味のない空っぽのスローガンになりかわる。その結果、無意識の虚無主義、現状への異議申し立てなど意味がない、いろいろ考えても仕方がない、というニヒリズムの世界に陥り、知らず知らずのうちに意識が収奪され、無化され、イナーシアに呑み込まれていくのである。

ではどうやってそこから離脱するのか。麻薬のような意識産業、マインド・コントローラーから離脱することなど、まず無理なことであるが、その影響をなるべく薄くすることは可能かもしれない。それには、直接体験を基盤とする実像の世界とのつきあい方をできるだけ増やすしかない。メディアというフィルター、仮想現実を織り込んだ虚像、を通してしか、ものを考えることができない、実感することができない、という状態からなんとかして抜け出すことである。

また、メディアの特徴として、次々に起こる事件や問題に、虚像であるが故に、根源的な疑いを差し挟まないようにすることである。たとえば、企業倫理が欠落して、大企業や行政機関の上部組織からの指示・命令はたれ流すものの、下部組織からの重大な失敗報告は上部まで達せず、うやむやにして是正されないまま致命的な信用失墜へと発展するが、謝罪場面が映し出されるだけで、破綻とまではならない「逆樹木型伝達システム」が流行している。だが、経済効率や利潤追求を優先せざるを得ない国家・企業の発展のためには、消費者大衆の生命や不運など犠牲にしてもやむを得ない、とは公表できまい。毎日のように頻発するこの種の不祥事と台頭するコンプライアンス論議が物語っているように、その核心について論じられることはなく、捨像していくのである。このようにして、メディア言語の中では、中味のない大量の言語が、現実を捨像していく。

人間の意識や言語の構造においては、見たくないものは見えない、言いたくないものは言えない、聞きたくないものは聞こえない（日本という狭い島国の共同体の中では、生き延びるための鉄則、見猿、言わ猿、聞か猿に類似する）という危険回避の脳内作用が働くようである。それがまた、現実逃避願望という仮想現実には拍車をかけている。

これは、3次元界の天文学的実像（刹那）を高次元界から点描しただけで、つい最近まで、定説であった九つの太陽系惑星から八つとなった第三惑星の地球に蔓延するような現象に嫌気がさして、抗議しているわけではない。高次元世界から俯瞰すれば、それまでの定説が塗りかえられたり、国家や組織の羅針盤があいまいな言語で180度転換したりするのは、仮想現実という歴史や文明がたどる趨勢なのである。

## 永遠に不完全なる言語

個々の言葉に完全なる一義的語義しか与えない完全言語を作り出せば、それで誤解や争いごとがなくなる完全なコミュニケーションを実現することが可能であろうか。

言語の曖昧性を論じるとき、主として次のような解釈を伴う。

ひとつは、現実の世界とことばの関係である。人類が現実世界をことばによって表そうとするとき、「刹那を具体化する」必要が生じる。実際の現実世界の事象は連続していて切れ目がないが、それを有限の語数からなることばで表現しなければならないため、ある事象を別の事象と区別するために切り分ける必要がある。すると、恣意的に切り分けられた結果としてのことばは、一種の仮想現実として機能することになる。もしも世界の全てを完全にことばに移そうとすれば語の数は無限になければならない。すべての語が一義的にしか機能しなければ解釈の相違や誤解も生じないかもしれないが、そのような言語は現実的ではない。なぜなら語の数は「無限」ではあり得ないし、仮に無限にことばを生み出したとしても人類には使いこなせない。ことばを作り出すための具象化の方法が、そもそも本質的に曖昧である。例えば「林」と「森」の境界線をどこに引けばよいだろう。人はこれらのことばを使う時、それを明確に示すことはできない。ただ、曖昧にぼやけた基準ですみわけしているだけなのである。

もうひとつは、それぞれの語が持つ多義性である。前述のように連続する無限の世界を分断された有限のことばで表現するため、ひとつひとつの語それ自体が担う意味は当然多義的にならざるを得ない。多義的ということは様々な解釈が可能であり、意味が曖昧であるということだ。個々の語の意味領域は明確でないため、語の意味は個別の文脈の中でのみ生まれることになる。「木を植える」、「木の椅子」、「金のなる木」等々と言うとき、それぞれの「木」は同じものではない。このような言い方が全て成立するのは、ことばに多義性があるためである。

人がコミュニケーションを行なうときには、ことばの「適度なあいまいさ」が良い方向に作用していると言える。日常的なコミュニケーションに用いられることばの意味は確定的なものではなく、だからこそ相互のコミュニケーションがスムーズに行われるのである。語の意味領域という角度から考えると、ある人の言う「林」は他の人にとっては「森」である可能性は大いにあるが、それは日常的な会話におけるコミュニケーションそのものを阻害するほどの問題にはならない。むしろ「林」と「森」のすみわけ方の基準が明確ではないからこそ個人の主観を超えた社会的コミュニケーションが可能になる。

ことばは、このようにその成り立ち（刹那の具体化）においても、個々の語の意味領域においても、個人の主観的なとらえ方においても、全ての段階で曖昧であり、その曖昧さによってコミュニケーションが成立する。ことばとコミュニケーションは仮想現実の世界において機能している。仮想現実であるコミュニケーションは、その人が使用することばによって操作可能であることも意味している。

人間も、言語も、機械の部品でさえも、「あいまいさ」という「遊び」がなければ機能しない。それぞれが、アイドリングという適度の不完全さを持たせるがゆえに長続きするのである。「ことばの曖昧さ」がなければ言語コミュニケーションは成立しないのである。

## おわりに

スペインのバルセロナにサグラダ・ファミリア（聖家族教会）贖罪聖堂がある。

石、セメント、ガラスで、出来ているとは信じられない。冷たい殺伐とした直線を避け、温かく包容し、魂の安らぎを誘う曲線が多く使われている。植物の蔓のごとく曲がりくねり、貝のごとく、螺旋状になり、老いも若きも純真でけがれなきあの頃に還っていく。美も醜も、愛も憎しみも、自由も束縛も、罪も罰もすべてをひとしく呑み込み、すべてを超越し、巨大な蟻塚のように天空にそそり立つ。出入りする人間たちは、まさしく蟻の行列にはかならない。世界中の言語を集めても、この聖堂を的確に描写することは不可能であろう。言語による表現の限界と不完全性を実感する。

老子は言う。「希言ハ自然ナリ」（第二十三章）自然にはもの言わざる言葉が満ちあふれる。自然はもの言わずして、あらゆる真理をおのずからにして語りかける。人間はいろいろなあげつらいをし、さまざまな理屈をこね、しかつめらしい言い訳をしたり、恩着せがましいおどし文句を並べたりするが、自然は黙々として一言も語らず、ただひっそりと造化のはたらきを展開していく。そのはたらきによって柳は緑に芽吹き、花は紅に咲き、鳥は空高くさえずるが、これが造化の真理だと言揚げすることもなく、自分の手柄だと吹聴することもない。しかも、そこではあらゆる真理が声なき声、言葉なき言葉で語られ、そのいとなみの功績は何物をも欺くことはない。このような無為自然の世界の言葉なき言葉を「希言」としてとらえ、その声なき声を「自然」と説いた老子の声が聞こえてくる。

建築主任はアントニ・ガウディという人であった。バルセロナから100キロほどの片田舎に生まれ、幼少の頃、彼はリュウマチを患い、同級生との接触も少なく、自然を観察することに熱中せざるを得なかった。その結果、自然界の動物や植物に親しく接し、バルセロナの建築専門学校を苦学して卒業した。やがて、その才能が資本家グエルに認められ、31歳の時聖堂の建設を任される運命が巡ってきた。

彼は前任者の設計図を排除し、自分がこどもの頃に見た森、森の木陰、カタツムリ、トカゲ、カメレオン等、全ての動植物を総動員させて、ふるさとの自然を再現する設計図に変更した。「私の師匠は一本の木である。一本の草である。自然界のすべてが私の師匠である。」と言って、地球の重力に従った構造をゆっくりと時間をかけて研究と実験を重ね、近代的な設計図や構造計算もなくとりかかり、その建築に生涯を捧げた。ガウディの建物は揺らぐことなく今も天空にそびえる。彼の遺志を継いで、贖罪聖堂は今も建造中である。完成まであと何百年かかるか分からない、という。

ことばについてオムニバス風の考察をしてきたが、建造物は不完全であってはならない。言語の不完全性やあいまいさを弄ぶ我が身を恥じ入るばかりである。

## 参考文献

- John Milton（原著）、平井 正穂（翻訳）『失樂園 上・下』岩波文庫  
Frijof Capra フリッチョフ・カプラ（原著）、吉福 伸逸（翻訳）『ターニング・ポイント』 科学と経済・社会、心と身体、フェミニズムの将来〈工作舎〉1982

- フリッチョフ・カブラ(原著), 吉福伸逸(翻訳)『タオ自然学』現代物理学の先端から  
「東洋の世紀」がはじまる 〈工作舎〉1990
- 立花隆・利根川進著『精神と物質』分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか 文芸春秋 1990
- 立花 隆(著) 脳を鍛える 東大講義「人間の現在」新潮社 2000
- 『ノーベル賞 10 人の日本人』読売新聞編集局編 中公新書ラクレ 2001
- 鴨長明『方丈記』岩波文庫 1989
- 高神覚昇(著)『般若心経講義』(改版)角川文庫 1996